
夢旅人

市丸乱菊

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夢旅人

【Nコード】

N7785H

【作者名】

市丸乱菊

【あらすじ】

様子がおかしい松本乱菊に近寄ると・・・日番谷隊長が松本の夢に入り込みます。そこで見たものは・・・

「つたく・・・・・・・・松本・・・・・・・・
お前は・・・・・・・・。。。」

藍染隊長の謀反の後、ようやく落ち着いてきたこの頃。

十番隊隊舎の執務室では、毎日のようにこの光景があった。

デスクの上に顔を埋める松本副隊長。

「俺も一段落したし・・・・・・・・。寝るか・・・・・・・・。ふああー」

大きく背伸びし、ソファーに寝転がった。

すると、そのとき・・・

「・・・・・・・・かないで・・・・・・・・。」

びっくりした日番谷は、はっと起き上がった。

「まっ松本っ!?!?!?」

松本を見たが、普通に寝ていた。

「行かないでっ・・・・・・・・・・!!」

松本の周りに灰が集まる。

「灰猫? 松本っ!! 霊圧のコントロールしろっ!?!?!」

日番谷は松本のほうに向かった。

時すでに遅し、部屋中が灰だらけになっていた。

「松本おぉooooooooっ!?!?!」

肩をゆするが、起きない。

「置いてかないでっ・・・・・・・・・・ギンっ!?!」

松本が叫んだ瞬間・・・・・・・・

日番谷の目の前が、突然まぶしくなった。

「まっもっ・・・・・・・・・・うわっ!?!?!」

意識が遠のくのがわかった。

日番谷が目を覚ますと、外に出ていた。

「なんだ？ここは・・・？」

見渡すと、枯れ木ばかりで、殺風景な場所だった。

そして倒れてる少女を発見した。

「大丈夫か？」

声をかけるが返事がない。

抱き起こそうとすると、手がすり抜ける。

「一体なんなんだ・・・？ここは・・・？」

自分の手を眺めた。

薄々気付く。

恐らく自分は異空間にいるのだと・・・。

すると、道の先から一人の男の子が何かを腕いっぱい抱えて歩いてきた。

「ん？」

少年が倒れてる少女に気付いた。

少女のところに歩いていく。

「やっぱり俺の姿は見てねーな・・・。」

日番谷はため息をついた。

「食べ。」

ニコニコした少年が少女の口元に腕いっぱい抱えた干し柿を1個差し出す。

「腹へって倒れられるゆうことは、キミもあるんやろ？
霊力。」

「・・・・・・・・キミ・・・・・・・・も・・・・・・・・？」

少女が出せる限りの声を出した。

「あア。ボクもや。市丸ギン、よろしゅうな。」

「市丸っ？？？？？」

日番谷は驚いた。

子供のときの市丸？？？？

そうするとこの少女は・・・・？

「ギン・・・・・・・・」

・・・・・・・・変な名前・・・・・・・・。」

「変な名前？？・・・・・・・・ボクはかっこええと思っててんけどなああ
・・・・・・・・はあ・・・・・・・・」

せや。キミ名前は？」

「……………松本……乱菊……………」

「松本っ……?!」

少し驚いたが、すぐに理解した。

なるほど……………そうだったのか……………

松本の霊圧が暴走したせいで、松本の夢に入ってしまったことを……

「乱菊？かわいい名前やなあ。仲良うしよな♪起き上がるかあ？」

市丸は手を差し出した。

「……………うん。」

市丸の手をとり、松本が起き上がった。

「……………これ美味しいね……………。なんていう食べ物なの？」

干し柿を食べながら、市丸に聞く。

「なんや、食べたことないんかぁ。これは干し柿ゆうてな・・・めっちゃおいしいねんっ♪」

そう言って嬉しそうに市丸も頬張った。

すると突然、日番谷の目の前がまぶしく光った。

「またか・・・」

さすが天才少年。もう動じなくなっていた。

「なあ。乱菊って誕生日いつ？」

市丸が問いかける。

松本の顔が曇る。

「知らない。あんたと会うまで日にち数えられるような生活してなかったし・・・。」

しばらくの沈黙の後、市丸が口を開いた。

「・・・・・・・・なら、ボクと会った日が乱菊の誕生日や。」

え????

つとした顔で市丸を見た。

「なっ。ええやろ乱菊。」

乱菊はきょとんとしている。

「いつ?」

「9月29日に会ったんやで♪」

「9月29日・・・・・・・・・・」

松本は少し照れながら少し笑った・・・

「・・・・・・・・皆同じさ。」

”自分の生まれた日が何時か”なんて
覚えてる人は誰もいない。
ただ自分の信頼する人が告げた日を
そのまま信じるしかないんだ。」

「本当かどうかは問題じゃない。

「自分の誕生日をしている」ことそ

既に幸せなんじゃないかと僕は思うん

れ自体が
だよ。」

藍染が言ってたな・・・
本当にそのとおりなのかもな・・・

松本・・・

「ねえ。ギンの誕生日はいつなの？」

今度は松本が聞き返した。

「ボクは9月10日や♪ちゃんと覚えといてなW」

「近いねあたしら♪」

「せやね。」

二人は笑顔に包まれてた。

そしてまた日番谷が光に包まれた。

「ギンーーーーっ！そっちいったよーーーー！！！」

河で遊んでる松本と市丸がいた。

「よっしゃー、でっかいの捕まえたるからなっ♪」

尖った木の枝で、市丸は魚を数匹あつという間に刺してしまった。

「乱菊うー！とつたでえーーーー！！！」

子供らしい笑顔で大きく松本に手を振る。

「やっぱすごいなあ。ギンは……」

市丸のそばまで走ってきた乱菊は口を尖らせてちょっと悔しそうだった。

「当たり前やんか。男は女の子守らなあかんねん。
そんなことはどうでもええやんw
はよ食べよ♪」

「うん♪」

「ほらっ」

市丸が差し出した手をにぎった乱菊は二人で川辺に上がっていった。
二人の顔には幸せそうな笑顔があった。

市丸・・・お前・・・

大事なものがあつたんだな・・・

そしてまた、日番谷の目の前が光った。

ここは・・・？なんだ？

薄汚い小屋の中みたいだった。

子供二人がそこに寝ていた。

「こんなところに住んでたのか・・・」

日番谷も流魂街出身だが、ちゃんと家は

あった。

突然、

「うわああああああああああつ！！！！！」

ぱっと市丸が起き上がる。

すごい汗だ。

「はあはあ・・・」

汗が止まらない。

「なんや・・・あれは・・・はあはあつ・・・」

市丸は息を切らしながら、となりで寝てる少女を見てほっとする。

「ごこんとこ毎日同じ夢みるわ．．．．．
疲れとんかなあ．．．．．」

額の汗を腕でぬぐった。

市丸．．．．．

霊力がつよくなってきて抑えられてな

いじゃないか．．．．．

俺と一緒にだったのか．．．

ふと、日番谷が松本と初めて会ったと

きのことを思い出す。

俺はばーちゃんを殺しかけて．．．
死神になった。

あのとき松本がいてくれなかったら．．

．．．．．

すると、はっとした。

血？

「なんやこれは??.?」

市丸は自分の腕を見ると、小さな切り傷がいっぱいあった。

「乱菊は???」

頬に微かの傷ができていた。

「あの刃か・・・・・・?」

はっとした。

「まさか・・・・」

自分の両手の手のひらを見て震える。

「あの刃が乱菊にあたったら・・・・・・」

市丸は立ち上がり、自分の毛布を乱菊にかけた。

「さいなら。乱菊。」

しんしんと降る雪の中、市丸は出て行った。

しばらくして松本が目覚めた。

「あれ?ギン?」

きよろきよろした。

となりには市丸の冷たくなった墓座があった。

小さな小屋の入り口には、小さな草履の足跡が、雪の中へ消えていつていた。

松本はしたを向き、ずっとその足跡を見つめていた。

松本・・・・・・・・

俺にはばーちゃんがいた。

雛森もいた。

俺は周りからは怖がられていたけど、

この二人が居たから・・・・・・・・

そしてまたあたりが眩しくなった。

ここは双極の丘????

.....

「動かないで。」

松本が市丸の首に刀をつける。

「.....すみません。藍染隊長。つかまってもた。」

藍染は碎蜂と四楓院につかまっている。

東仙は檜佐木につかまっている。

天空には10対以上の大虚。

そして天から半膜が降り注ぐ。

その光の中では、外からはもう何もできない。

「……ちよつと残念やなあ……
もうちよと捕まつとつても良かったのに……

さいなら

乱菊

「ご免な。」

松本は何も言えなかった。

最後にあんな優しい表情をするなんて……………

余計に胸が詰る……………

ギンっ！！

いけないでっ！！！！

お願い……………

もうどこにも行かないで……………。

声には出せなかった。

そうして3人の隊長が天に消えていった。

……

俺が倒れてるときにこんなことが……………

そして日番谷は黒い闇に覆われた。

気がつくと、灰に包まれた執務室だった。

机には寝ている松本。

目には涙が。

「松本っ！！！！起きるんだっ！！！！！！！！」

おおきく揺さぶる。

「????????」

たいちよー!??

どうしたんですか???

ずっと目が覚める。

すると不思議なことに灰が消えていた。

「あ・・・・・・・・いや・・・・・・・・」

起きて胸を撫で下ろした。

「夢を見てたんです。

昔の・・・・懐かしい夢を・・・・。。」

「そうか。」

ひとつだけ忠告する。

涙をふけ……………」

後ろを向き、てくてくと歩いて行った。

「え？」

松本は自分が知らない間に、目にいっぱい涙をためていた。

「なんでだろ……………」

なんでこんなに……………」

泣いてんのよお……………」

あたしはあ……………!!!!」

唇を噛み締め、机をドンッと叩いた。

日番谷は扉を閉めてドアの向こうで大泣きする松本の声を聞いていた。

「ま・・・たまには泣くのもいいよ・・・」

松本の思いが強すぎて、灰猫と同調したことによって松本の夢をみたのか・・・

それはわからないが・・・

あいつも色々大変だったんだな・・・

あそこまで取り乱すほど、

市丸のことを好きだったってことか・・・

俺は、雛森のところに顔だすかな・・・

あいつも重症だよな・・・

終わり。

はあ
・
・
・
・
・

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7785h/>

夢旅人

2010年10月20日18時55分発行